

コロナ危機(COVID-19)に考える

経済成長、グローバリゼーション、 バタフライ効果、豊かな生活

堀内伸介
SRID 会員

バタフライ効果

武漢で発生した COVID-19 による中国全土への感染のニュースを見てバタフライ効果を思い出しました。新型ウイルスが武漢の市場から労働者に感染し武漢市から中国の他の地域、さらにはアジア、ヨーロッパ、アフリカ、北米、南米まで拡散し、世界政治、経済、社会を厳しい混乱に陥れている様は、まさに蝶々の微妙な羽ばたきが、大嵐を引き起こすように、目にも見えない新たなウイルスが、パンデミックを引き起こしています。

グローバリゼーション

冷戦の終結後、自由主義経済、市場開放の旗印のもとに米国、西欧諸国に始まり、次第に多くの途上国を巻き込んだ新たな世界経済秩序が 21 世紀に引き継がれています。この新たな経済システムをグローバリゼーションと呼ばせてもらいます。多くの国の政治、経済、社会のあらゆる要素を複雑な相互依存関係の中に組み込んでいると理解しています。

もう少しこのグローバリゼーションを分解してみると、特に目に付くのが製造業におけるサプライチェーンではないでしょうか。Apple 社の発表によれば、2019 年の同社のサブコントラクターは 1142 社、49 か国に跨っております。2008 年の世界金融危機で明らかとなった世界金融の分野、デジタル化を反映した運輸通信、特にインターネットの普及は通信分野に革命的な変革をもたらしています。運輸においても、コンテナ化による効率的な海運、空輸は物流と人の移動を画期的に増加しています。気候変動を含む環境分野における国際的な関連も無視できません。今回のパンデミック対策を含む保健医療分野、国際的な所得格差もグローバリゼーションの大きな問題分野です。これら多くの分野を横断して繋ぐ国際的なガバナンスの問題は重要な国際課題であると指摘できます。

グローバリゼーションは複雑な相互依存関係と先に述べましたが、ざっくばらんに言えば、世界というお皿に載ったスパゲティータのようなもので、どの一本のスパゲティータを引いても、他のスパゲティータも動きます。どのように絡まりあっているのか、良く解りません。金融分野をとってみても、分野全体を監視、コントロールする制度と運営母体はありません。各国の金融組織、制度、法律は異なり、世銀、IMF とか国際金融機関が金融分野全体をコントロール出来るわけでもありません。各分野においても、分野間の関係においても、多くのリスクが内蔵されています。コロナ禍も保険

医療分野のリスクが危機として多くの分野に拡散したのと言えましょう。

組織的なリスク

特に組織的なリスクを指摘したいと思います。2008年の金融危機は、米国の住宅価格が上がり続け、高リスクの借り手に対して金融機関が過剰に貸し込み、ここで貸し付けが終わっておれば、多分一銀行の不良債権化、すなわち金融組織の一部品の取り換えでリスクを最小限に抑えることができたのですが、問題は大手銀行や証券会社によるサブプライムローンの証券化で、世界の金融機関や機関投資家は、そのリスクに対して鈍感となり、その証券に投資し、住宅バブルがはじけると、その価値は激減し、その影響は世界に伝播しました。当該分野全体のみならず、他の分野まで波及して大不況をもたらしました。その危険を持つのが組織的なリスクです。スパゲティー一本では済まないリスクです。組織的リスクによる危機は、サプライチェーン関連でもしばしば経験してきました。

トヨタの生産方式は、画期的なマネジメントシステムで、生産システムのグローバル化に大きく貢献しました。サプライヤーから顧客への製品やサービスの移動、人材、技術、生産、情報、資金のシステム化です。物流の合理化、コンテナの標準化、インターネットの利用が商業のやり方まで変えました。特に中国における企業の民営化、自由化はサプライチェーンのグローバル化を大きく変えたといえるでしょう。組織的なリスクとして自然災害、パンデミック、テロ、データの盗用、サイバー攻撃、過剰な競争等が指摘できます。2011年のハードディスク生産の拠点だったタイにおける洪水や福島の津波は多くの部品の生産を止め、最近では武漢の部品生産停止が世界的な製造業のチェーンに影響を与えています。

経済成長、GDP

6月8日に発表された世銀の「世界経済展望；2020」によれば、今年の世界経済は5.2%の縮小が予想されています。成長の減速は、米国：-6.1%、ユーロ圏：-9.1%、日本：-6%、ブラジル：-8%、メキシコ：-7.5%、インド：-3.2%で、中国のみが1%成長が予想されています。この経済の減速は過去80年で最悪と指摘されています。国際機関のみならず、わが国政府も各国政府も経済状況の最初の指標はGDPであり、経済政策の根幹となっています。経済成長の重要な指標としてのGDPがあたかも我々の生活の豊かさを示す大まかな物差しとして受け止められています。グローバリゼーションは一方で技術革新の結果ですが、他方経済成長を促進する望ましい過程として認識され、積極的に支援されている側面もあります。現在のグローバリゼーションはGDPと表裏一体の関係にあるとも言えないでしょうか。

1934年にクズネッツが「National Income 1929~32」を出版しました。国民所得統計の最初の出版物です。彼は国民の福祉、豊かさを測る意図であったが、同書の数字では国民の福祉は測れないと明言しています。1968年にロバート・ケネディーがカンサス大学で演説をしています。GDPについて厳しく批判し、「GDPは測れるものをす

べて測るが、人生を価値あるものとするものは測っていない」と言っています。演説の内容から判断すると具体的な福祉よりも感覚的な幸福を指摘していると思います。GDPが測りえない人生の豊かさを測る努力は、多くのエコノミストも国家もしています。ブータンの **Gross National Happiness** は有名ですし、国連も **The World Happiness Report** を出版しています。内閣府も幸福度指標を発表しています。最大の経済大国である米国においても、今回のパンデミックでは、失業者は街にあふれ、食料品を無料で配るところに長い行列ができています。多くの労働者はその月の所得が無くなれば、生活できず、蓄えもない様子です。世界第3の経済大国であるわが国でも同じ事情が報じられています。他方、わが国の個人の預金、債券、株式等金融資産は、2018年で1000兆円をこえています。所得格差が非常に大きいことを示しています。

貧富の差はGDPでは示されません。経済成長にあまりにも入れ込んだ政策とグローバリゼーションは、そのシステムの中に多くのリスクを内蔵し、成長を求めた結果が資源の無駄、公害、気候変動、貧困、不平等、都市化など国民生活にはマイナスをもたらしてはいないでしょうか。現代の物質的な豊かさは、第二次大戦後の困窮生活を覚えている筆者には、威圧的さえありますが、これが我々の生活の質の向上でしょうか。幸福な生活とは、相互信頼に基づいた人間関係と自然環境との調和のとれた生活と考えます。また、個人主義ではなく、信頼に基づく共生であり、競争ではなく、協力が豊かな生活を築くのではないのでしょうか。

結語：新たなグローバリゼーション

COVID-19によって引き起こされた世界経済の崩壊は、グローバリゼーションに内在する組織的なリスクマネジメントの失敗とも言えます。この危機からの回復は、グローバリゼーションの各分野に内蔵されている組織的リスクを洗い出し、リスクフリーにすることですが、理屈の上ではそれが最上でしょうが、すべてのリスクとその引き金を確定することさえ現実的ではないでしょう。例えば、数ヶ国の数都市に分散されている部品生産をすべて一国内で生産すれば、サプライチェーンのリスクは軽減されますが、生産のコストの軽減、効率化が損なわれ、グローバル化の意味がなくなります。今後も影響の大きな危機は、1) 公害などを含む気候変動による災害、例えば、世界の気温が2°C上がれば農業生産をはじめとして広範な災害が起きるでしょう。2) 人畜共通感染症によるパンデミックは、都市化、森林の伐採、農地の拡大等の結果として動物の生息地域を奪い、人に伝染します。3) 国内及び国際的な所得格差の拡大という引き金によって引き起こされる社会的な不安ではないかと推測しております。

現在のグローバリゼーションに強く反旗を振る人々がいます。偏狭なナショナリズム、外国人排斥、人種偏見を前面に出している人々です。「アメリカファースト」も一例です。国際協調などに恐れを抱いている人々です。そのような偏見の中から新たな世界が生まれるとは思えません。現在の危機からの脱出は、国際協調を踏まえた新たなグローバリゼーションに見いだされると考えます。知的な改革と制度的な改革が必須で

す。われわれの住む世界の進歩は、自然資源や人的資源の搾取ではなく、適切な技術で支援しながら人と人、人と生態系の相互作用の質と量を向上させることにありとおもいます。当然国際的な協力、相互依存関係が育まれてゆくでしょう。各国政府、国際機関による効率的な世界的なガバナンスの理念と弾力性がビルトインされた制度が明確にされなければならないでしょう。